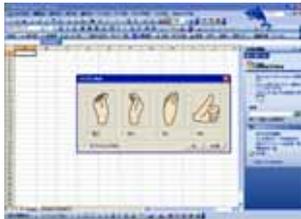


平成19年度 香算研新春研修会「教材」ワークショップ資料

部会	学年	教科書, 単元名	提案者
下学年部会	1学年	啓林館 「あわせていくつ ふえるといくつ」	

「教材」名	「ブロック操作」に着目させるための大きな手		
概要	1学年の児童が、たしざんの理解を深めるためには、合併や増加の場面の異同を捉えることが重要である。そこで、この「大きな手」を用いることで、ブロック操作に児童の観点を集中させ、場面の異同を捉えさせることができる。		
作り方	<p>作成の手順</p> <p>「こうぐ」の「絵図」内の「手」をコピーし、ワードや一太郎などのソフト上に画像として貼り付ける。</p>  <p>貼り付けた絵を、拡大して印刷する。(一太郎では、印刷ウインドウを開いて「ポスター」を選択し、A3用紙8枚ぶんくらいの大きさに分割して印刷できる。)</p>  <p>印刷したものを、固い紙に貼り、切る。文具店で「スチレンボード」を購入すると便利。軽くて加工しやすく、丈夫ですが、少し値ははります(畳1畳分のサイズで1枚2420円。もう少し小さいサイズもあるそうです。)</p>  <p>裏に、マグネットを貼り、黒板上で提示できるようにする。</p> 		

<p>用い方</p>	<p>場面（単元内）：増加の場面を捉え，演算を考える場面 場面（授業内）：増加の場面での演算を考える際</p> <p>子どもに，増加の場面をブロック操作で表現させる。 既習の操作と比べる際に，本教具を用いる。 合併も増加も，同様にたし算で計算できることを確認する。</p>
<p>期待される効果</p>	<p>この場面では，操作する手の動きに着目させることで，合併との異同をはっきりさせる。「動かし方は違うけれど，既習と同様のたし算でできる。」と増加の場面を捉えさせていくことができる。</p>
<p>「指導」の際の留意点</p>	<ul style="list-style-type: none"> 合併の場面のブロック操作を，子どもと共通理解しておくことが前提となる。 本「教材」は，板書上で提示する，提示用の大きなブロックと併用することが効果的である。 ブロック操作をしながら全体で話し合う際，合併の場面での操作と比べる等しながら，まず，子どもに「動かし方が前と違う。」と気付かせたい。その後，「動かし方を確認するため」という必要感を持たせた上で，本教具による提示を行いたい。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="376 1043 858 1413"> </div> <div data-bbox="951 1043 1401 1413"> </div> </div> <p style="text-align: center;">【子どもが動かし方の違いに気付く】</p> <p style="text-align: center;">【「教材」を用いて違いを確認】</p> <ul style="list-style-type: none"> 提示に使用する物を，手＋提示用ブロック 手のみ，とすることで，ブロックの操作の仕方を基に場面を捉えさせたい。 本時以後，たし算の場面では本「教材」を繰り返し用いて場面を捉えさせていく。同時に，手の動きを動作化したり，言葉でまとめたりして，子どもが念頭で考えられるようにしていく。

最終的に子どもと、「（両手で動作化しながら）手がパチンという場面は，ブロックが増えるお話。たし算で計算できる。」とまとめた。2学期の学習である「3つのかずのけいさん」や、「たすのかなひくのかな」でも，問題文を読んで場面を捉える際には，小さな動作で「パチンだから，増えてたし算。」とつぶやく子どもの姿が見られた。